

演題:「A 型インフルエンザ罹患後に気腫性胆嚢炎を発症した一例」

瀬戸内徳洲会病院 初期研修医
岸和田徳洲会病院二年次 福尾 祐介

【症例】91 歳、女性

【既往歴】2 型糖尿病、高血圧、脂質異常症、慢性心不全、MRHE による低ナトリウム血症、巨大卵巣嚢腫

【現病歴】20××年 2 月朝から発熱、咳嗽、喘鳴を認めたため当院外来を受診された。

【身体所見】両側前胸部にⅡ度の wheeze 聴取、coarse crackle 聴取、前胸部で rattling あり、腹部所見なし

【検査結果】インフルエンザ迅速検査 A 型陽性

【臨床経過】入院時は明らかな肺炎像を認めず、炎症反応も乏しく、インフルエンザの加療を行い翌日以降は発熱を認めなかった。第 2 病日より鼻カヌラでの酸素投与が開始され、酸素状態が安定しないため第 5 病日に血液検査、胸部レントゲン検査を施行した。血液検査にて白血球 14300/ μ L、CRP19.37mg/dL と炎症反応を認めた。しかし、問診、診察で原因が明らかではなかったため、胸腹部 CT 検査を施行したところ、気腫性胆嚢炎の所見を確認した。その後、すぐに加療目的に転院となった。転院後、抗菌薬による保存的加療が選択された。状態は改善し、第 23 病日に退院となった。

【考察】インフルエンザの合併症としては気腫性胆嚢炎のような肝胆道系の感染はあまり報告されていない。高齢者は発熱をあまり呈しにくい。また、身体所見で腹部所見の取り方において若年成人と比較して感度が劣る点が認められる。

【結語】高齢者においてインフルエンザや感染を契機に別の疾患を続発することがある。高齢者では身体所見で異常が出にくい事があるため注意を要する。